

『Ost=Asien』研究

—その3. 人名注解；日本人編—

Reserches on “Ost=Asien” —No.3 A Biographical Annotation ; The Part of Japanese—

泉 健

IZUMI Ken

2003年10月8日受理

序

昨年から、ドイツ語の月刊雑誌『Ost=Asien』の人名注解を作成している。それぞれの人物の紹介と、全139号の目次の人名索引を兼ねたものである。この人名注解を通読することにより、この雑誌が刊行された時代の社会的、政治的、文化的背景が浮かび上がってくるようにすること、これが人名注解作成の主要な目的の一つである。

昨年は外国人編を作成したので（次章の参考文献の番号36参照）、今回はその続編として日本人編を作成した。外国人編は氏名のアルファベット順に配列したが、日本人編は50音順にした。各人の経歴に関しては、『Ost=Asien』が刊行されていた時期、つまり1898年（明治31）—1910年（明治43）頃の活動に重点を置いた。また今回は個人名だけではなく、団体名もいくつか含んでいる。

外国人編の場合と同じく、各人物の生没年の次には、その名前が目次に登場した『Ost=Asien』の通巻号数をすべて記載した。またその人名は、著者名として目次の中に現れた場合のみではなく、各論文、エッセイなどのタイトルの中に現れた場合も含んでいる。従って、一昨年翻訳した『Ost=Asien』全目次（次章の参考文献の番号35参照）と、この外国人編及び日本人編の人名注解を併用することによって、目次に登場した人物の概要を知ることができるだけでなく、『Ost=Asien』の何年何号にその人名が登場するか、そしてまたある人物が何年何号にどのような論文、エッセイを書いたかということもわかるようになっている。ただし昨年の外国人編の場合と同様に、『Ost=Asien』に登場する日本人名のすべてを調査することはできなかつた。次章に挙げた参考文献・引用文献のどこにも載っていない人物が数名残った。従って以下の日本人編も、現在までに調査し得た範囲内でのものである。なお本稿の最後に、『Ost=Asien』に関する過去2回の上記拙稿の正誤表を掲載したので参照されたい。

I. 参考文献

この章では、本稿で使用した参考文献・引用文献を内容別に10種類に分類し、説明を必要とする文献に関しては、各グループの最後に簡単なコメントを付け加えておいた。

1 戦前の人名辞典の復刻版

- 1) 『大日本人名辞書』全5巻 (田口卯吉編『大日本人名辞書』経済雑誌社、1886; 講談社、1974)
- 2) 石田常太郎『明治婦人録』(『大日本婦人録』 婦女通信社、1908; 日本図書センター、1988)
- 3) 『明治人名辞典』全3巻 (成瀬麟他編『大日本人物誌』八紘社、1913; 日本図書センター、1994)
- 4) 芳賀矢一『日本人名辞典』(大倉書店、1914; 思文閣、1972)
- 5) 『大正人名辞典』全2巻 (五十嵐栄吉編著『大正人名辞典』東洋新報社、1918; 日本図書センター、1987)
- 6) 松本竜之介『明治大正文學美術人名辞書』(出版社不詳、1926; 国書刊行会、1980)
- 7) 大植四郎編『明治過去帳 物故人名辞典』(私家版、1935; 東京美術、1973)
- 8) 『日本人名大事典』全7巻 (『新撰大人名辞典』平凡社、1937; 平凡社、1979)
- 9) 『昭和人名辞典』第1巻 (東京編) (谷元二編『大衆人事録』帝国秘密探偵社、1942; 日本図書センター、1987)

今回の日本人編では、明治大正時代に生存した人物が多かったため、戦前の人名事(辞)典でなければ氏名が掲載されていないものが多く、1～9の事典・辞書が大変役立った。1の『大日本人名辞書』は1937年の新訂第11版を復刻したものであり、現在では講談社学術文庫(1980)にも収められている。7には、学業半ばにしてベルリンで客死したような人物、すなわち一般に人名事典には掲載されていないような人名がかなり含まれおり、不詳であった人物の10人余りをこれで確認することができた。

2 戦後の人名事典、海外交流史事典、歴史辞典、百科事典など

- 10) 石井良助監修『江戸幕府諸藩人名総鑑』全2巻 (柏書房、1983)
- 11) 藩主人名事典編纂委員会編『三百藩主人名事典』全4巻 (新人物往来社、1986)
- 12) 吉田祥朔『近世防長人名辞典—増補版』(マツノ書店、1976)
- 13) 手塚晃他編『幕末明治海外渡航者総覧』全3巻 (柏書房、1992)
- 14) 戦前期官僚制度研究会編『戦前期日本官僚制の制度・組織・人事』(東京大学出版会、1981)
- 15) 外務省外交資料館日本外交史辞典編纂委員会編『新版日本外交史辞典』(山川出版社、1992)
- 16) 富田仁編『海を越えた日本人名事典』(日外アソシエーツ、1985)
- 17) 富田仁編『海外交流史事典』(日外アソシエーツ、1989)
- 18) 富田仁編『事典近代日本の先駆者』(日外アソシエーツ、1995)

- 19) 芳賀登他監修『日本女性人名辞典』（日本図書センター、1993）
- 20) 上田正昭他編『日本人名大辞典』（講談社、2001）
- 21) 新人物往来社戦史室編『日本陸軍指揮官総覧』（新人物往来社、1995）
- 22) 福川秀樹編著『日本陸海軍人名辞典』（芙蓉書房出版、1999）
- 23) 稲村徹元他編『大正過去帳 物故人名辞典』（東京美術、1973）
- 24) 朝日新聞社編『朝日新聞100年の記事に見る 9 追悼録 明治大正編』（朝日新聞社、1979）
- 25) 朝日新聞社編『朝日新聞100年の記事に見る 10追悼録 昭和編』（朝日新聞社、1979）
- 26) 日外アソシエーツ(株)編『昭和物故人名録（昭和元年～54年）』（日外アソシエーツ、1983）
- 27) 『日本歴史大辞典』全12巻（河出書房新社、1956）
- 28) 国史大辞典編集委員会編『国史大辞典』全15巻（吉川弘文館、1979—1997）
- 29) 日本近代文学館他編『日本近代文学大事典』全6巻（講談社、1977）
- 30) 『大日本百科事典 ジャポニカ』（小学館、1972）
- 31) 『ブリタニカ国際大百科事典』（ティービーエス・ブリタニカ、1975）
- 32) 『世界大百科事典』（平凡社、1988）

『Ost=Asien』No.68(1903年11月号)に「浜松の山葉楽器工場」という記事があり、その著者の名前は目次には出ていないが、記事を読んでもと文中にH.Wadaと記されている。14の文献によれば、その肩書きなどから当時の農商務省総務長官和田彦次郎であることがわかった。

『Ost=Asien』には様々な分野の人物が登場するために、多種多様な人名事典が必要となる。

3 ベルリン大学の在籍記録と玉井喜作宅寄せ書きなど

- 33) Hartmann, Rudolf. *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870—1914*. Berlin: Mori-Ôgai-Gedenkstätte der Humboldt-Universität zu Berlin, 1997. 2000².
- 34) 泉巖復刻『玉井喜作宅における寄せ書き』（私家版、1986）
- 35) 泉健「『Ost=Asien』研究—その1.全目次—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第52集、2002年、pp.107—204.
- 36) 泉健「『Ost=Asien』研究—その2.人名注解；外国人編—」『和歌山大学教育学部紀要 人文科学』第53集、2003年、pp.33—71.

33は、1870年（明治3）から1914年（大正3）までの44年間に、ベルリン大学に在籍した日本人の名簿である。1997年の初版では氏名がアルファベットで表記されていたが、2000年の第2版では氏名のみが漢字で表記されており、今回の日本人編を作成するに当たって、人名の漢字を確定する際に大変役立った。筆者は1999年にベルリンを訪れた際、ウンター・デン・リンデン通りの近くにある森嶋外記念館で1997年版を入手したが、帰国後、玉井喜作の伝記の著者新村俊武氏（文献103参照）より2000年版を拝借することができた。ここに改めて御礼申し上げる次第である。

このハルトマンの在籍名簿の中で、今回の日本人編に掲載されているのは以下の19人である。

姉崎正治、青木周蔵、近重真澄、穂積陳重、市川代治、河原林櫻一郎、松原新之助、松村松年、中井元吉、老川茂信、大村仁太郎、斎藤紀一、斎藤仙也、関場不二彦、白井光太郎、立花銃三郎、玉井喜作、津軽英麿、宇佐美濃守。

この中で、河原林櫻一郎の「櫻」は、この名簿では「梯」になっているが、本章参考文献の13により「櫻」であることがわかった。白井光太郎の「光」も、この名簿では「密」になっているが、同じく27により「光」であることがわかった。市川代治は、第2版の名簿でも氏名がアルファベットで表記されているが、34により漢字が判明した。

この34の『寄せ書き』は、留学などの目的で明治30年代のベルリンに滞在した日本人が、玉井喜作宅で歓談した記録として、それぞれの機会に書き残したものである。日付は1900(明治33)3月30日から1906年(明治39)3月15日までとなっており、この6年間の玉井家の様子を伝える貴重な資料となっている。この中には美濃部達吉、新渡戸稲造、藤代禎助*、辻高衡、津軽英麿*、松村松年*、高岡熊雄、後藤新平*、長岡外史*、巖谷小波*、川上音二郎*、川上貞奴*等々の名前が見られる(*印は本稿日本人編に掲載した人物)。学者・官僚・軍人・作家・俳優など、実に様々な人間が出入りしていたことがわかる。

4 大学史、留学史など

- 37) 学習院『開校五十年記念 学習院史』(学習院、1928)
- 38) 石附実『近代日本の海外留学史』(ミネルヴァ書房、1972; 中央公論社、1992)
- 39) 渡辺實『近代日本海外留学生史』上下2巻(講談社、1977-1978)
- 40) 中山茂『帝国大学の誕生 国際比較の中での東大』(中央公論社、1978)
- 41) 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第1-5号(獨協学園百年史編纂委員会、1979-1981)
- 42) 獨協学園百年史編纂委員会編『目で見る獨協百年』(獨協学園、1983)
- 43) 神品芳夫編『「日本におけるドイツ語文化回顧展」カタログ』(郁文堂、1990)
- 44) 宮永孝『日独文化人物交流史 ドイツ語事始め』(三修社、1993)

東京大学の名称の変遷に関しては、40のp.5の一覧表に基づいて表記した。すなわち幕末の頃以降に注目してみると、1863年(文久3)の医学所、開成所以来、数度の名称変更を経て、1877年(明治10)以降は東京大学、1886年(明治19)以降は帝国大学、1897年(明治30)以降は東京帝国大学、1947年(昭和22)以降は東京大学となっている。

5 欧米使節団、比較文化論など

- 45) 芳賀徹『大君の使節 幕末日本人の西欧体験』(中央公論社、1968)
- 46) 久米邦武編・田中彰校注『米欧回覧実記』全5巻(岩波書店、1977-1982)
- 47) 久米美術館編『久米邦武と『米欧回覧実記』展』(久米美術館、1985)
- 48) 田中彰他編著『『米欧回覧実記』の学際的研究』(北海道大学図書刊行会、1993)

- 49) 田中彰『岩倉使節団の歴史的研究』（岩波書店、2002）
- 50) 平川祐弘『和魂洋才の系譜』（河出書房新社、1971）
- 51) 吉田光邦『両洋の眼 幕末明治の文化接触』（朝日新聞社、1978）
- 52) 平川祐弘『西欧の衝撃と日本』（講談社、1985）

明治初期、米欧に派遣された岩倉使節団（1871—1873）には、今回の日本人編に掲載の人物の中では、伊藤博文が副使として、山田顕義が理事官として参加している。この長旅の記録は久米邦武による『米欧回覧実記』（46の文献）として残されているが、最近この本の英訳と独訳が出版された。

英訳は全5巻からなる全訳で、次の通りである。Editor in Chief; Graham Healey, Chushichi Tsuzuki (都築忠七). *The Iwakura Embassy, 1871—73. A True Account of the Ambassador Extraordinary & Plenipotentiary's Journey of Observation Through the United States of America and Europe. Compiled by Kunitake Kume.* (日本文献出版社、2002)。また独訳は、ボン大学のDr.ペーター・パンツァー教授が中心となって編纂翻訳された抄訳で、ドイツ語圏の3カ国、すなわち当時のドイツ帝国、オーストリア・ハンガリー帝国、スイス連邦の部分の翻訳である。書誌データは次の通りである。

Übersetzt und herausgegeben von Peter Pantzer. *Die Iwakura-Mission. Das Logbuch des Kume Kunitake über den Besuch der japanischen Sondergesandtschaft in Deutschland, Österreich und der Schweiz im Jahre 1873.* München: IUDICIUM Verlag, 2002.

6 海を渡った曲芸師、演劇団など

- 53) 宮岡謙二『異国遍路 旅芸人始末書』（修道社、1959；中央公論社、1978）
- 54) 木村毅『海外に活躍した明治の女性』（至文堂、1963）
- 55) 倉田喜弘『一八八五年ロンドン日本人村』（朝日新聞社、1983）
- 56) 大島幹雄『海を渡ったサーカス芸人 コスモポリタン沢田豊の生涯』（平凡社、1993）
- 57) 北上二郎編『海を渡った日本人』（福竹書店、1993）
- 58) 倉田喜弘『海外公演事始』（東京書籍、1994）
- 59) 宮永孝『海を渡った幕末の曲芸団 高野広八の米欧漫遊記』（中央公論社、1999）
- 60) 倉田喜弘『芸能の文明開化 明治国家と芸能近代化』（平凡社、1999）

幕末から明治にかけて欧米に出かけていったのは、将来学者、医者、官僚、政治家、軍人などになる人物ばかりではなかった。それとは全く異なる人々、すなわち足芸、手品、独楽回しなどの曲芸師一座、獅子舞、皿回しなどを行う太神楽の一行、芸妓の一团、芝居の一座なども、当時かなり欧米に出かけている。この日本人編では川上音二郎、川上貞奴、福島,T.のロイヤル日本一座、西浜・松井一座などがそれにあたる。芝居の川上音二郎、川上貞奴の場合は言うまでもないが、おそらく曲芸師や太神楽や芸妓の一团においても、その上演の際には日本の楽器、日本の歌が付随したものである。幕末に来日した欧米人の、日本における日本音楽体験の一端について

ては、例えば60の文献 (pp.32-33) などに紹介されているが、これら日本の伝統音楽が欧米の地でどのように受容されたかを調査することは、今後残された興味深い課題の一つと言える。

7 日本における西洋音楽の受容

- 61) 中村洪介『西洋の音、日本の耳 近代日本文学と西洋音楽』(春秋社、1987)
- 62) 塚原康子『十九世紀の日本における西洋音楽の受容』(多賀出版、1993)
- 63) 中村理平『洋楽導入者の軌跡 日本近代洋楽史序説』(刀水書房、1993)
- 64) 中村理平『キリスト教と日本の洋楽』(大空社、1996)
- 65) 奥中康人「岩倉使節団が見聞きした西洋音楽」『待兼山論叢・美学編』33号、1999年、pp.47-67
- 66) 笠原潔『黒船来航と音楽』(吉川弘文館、2001)
- 67) 中村洪介・林淑姫監修『近代日本洋楽史序説』(東京書籍、2003)

上記6のグループの文献とは逆に、7のグループは、日本で西洋音楽がどのように受容されてきたかに焦点を当てたものである。65と66以外はいずれも浩瀚な研究書であるが、この分野に関しては、実に詳細緻密な研究が近年続々と現れている。今回の日本人編の中に登場する姉崎正治、巖谷小波、大村仁太郎、藤代禎助には、滝廉太郎との接点があり、また幸田幸も『Ost=Asien』刊行時にちょうどベルリンに留学していた。滝や幸田は、ドイツで西洋音楽を受容し始めた最初の世代の日本人であった。彼らが登場する前後の日本の音楽文化の状況を知るために、7のグループの文献は大変役立った。

8 万国博覧会、ジャポニスム、アール・ヌーヴォー関係

- 68) 吉田光邦『図説万国博覧会史 1851-1942』(思文閣、1985)
- 69) 鹿島茂『絶景、パリ万国博覧会 サン＝シモンの鉄の夢』(河出書房新社、1992)
- 70) 井上さつき『パリ万博 音楽案内』(音楽之友社、1998)
- 71) サミュエル・ビング『藝術の日本』ジャポネズリー研究会編訳 (美術公論社、1981; 原雑誌刊行期間、1888-1891)
- 72) 海野弘『アール・ヌーボーの世界 モダンアートの源泉』(造形社、1968; 中央公論社、2003)
- 73) 大島清次『ジャポニスム 印象派と浮世絵の周辺』(美術公論社、1980; 講談社、1992)
- 74) 日本経済新聞社編・西澤信彌訳『アール・ヌーヴォー展』(日本経済新聞社、1981)
- 75) 由水常雄『ジャポニスムからアール・ヌーヴォーへ』(美術公論社、1984; 中央公論社、1993)
- 76) 国立西洋美術館学芸課編『ジャポニスム展図録』(国立西洋美術館、1988)
- 77) デボラ・シルヴァーマン『アール・ヌーヴォー フランス世紀末と「装飾芸術」の思想』天野知香他訳 (青土社、1999; 原著 1989)
- 78) 稲賀繁美『絵画の東方 オリエンタリズムからジャポニスムへ』(名古屋大学出版会、1999)
- 79) ジャポニスム学会編『ジャポニスム入門』(思文閣、2000)

幕末から明治にかけて、立身出世、富国強兵をめざして多くの日本人が欧米に留学した。またかなりの数の旅芸人の一座も、かの地に旅立っていった。そのような時代の中で、『Ost=Asien』は1898年(明治31)4月から1910(明治43)2月まで、ベルリンで刊行された。この19世紀後半から20世紀初頭の時代には、万国博覧会などによって日本の文化芸術がヨーロッパに紹介され、ジャポニズムが生まれ、やがてそれが一つの刺激となってアール・ヌーヴォーが誕生した。『Ost=Asien』刊行の時期は、まさに美術史上のアール・ヌーヴォーの時代に対応している。

近年再評価されてきたジャポニズム、アール・ヌーヴォーの歴史的経緯を視野に入れておくことによって、『Ost=Asien』の中の記事をより深く読みとることも可能となるであろう。本稿に登場する森村兄弟社の歴史などを調べてみると(本稿pp.75-76参照)、特にその感を強くする。また本稿の項目、西園寺公望と松方正義の経歴を並べてみると、両者には1878年のパリ万国博覧会への関与という共通の接点が見いだせることもわかる。

9 世紀末の都市と文化

- 80) アンドレ・ヴァルノ『パリ風俗史』北澤真木訳(講談社、1999; 原著 1930)
- 81) 海野弘『世紀末の街角』(中央公論社、1981)
- 82) 加藤雅彦『中欧の崩壊 ウィーンとベルリン』(中央公論社、1983)
- 83) 渡辺淳『パリの世紀末 スペクタクルへの招待』(中央公論社、1984)
- 84) 宮下健三『ミュンヘンの世紀末 現代芸術運動の源流』(中央公論社、1985)
- 85) 辻邦生編『世紀末の美と夢』全6巻(集英社、1986)
- 86) 山之内克子『ウィーン ブルジョアの時代から世紀末へ』(講談社、1995)
- 87) 海野弘『世紀末の音楽』(音楽之友社、1995)

『Ost=Asien』という雑誌を、当時のより広い時代背景の中で捉えていくためには、それが発行された都市ベルリンだけではなく、同時期のパリ、ロンドン、ミュンヘン、ウィーンなどの諸都市の状況を知ることも必要である。それによって、音楽、美術、文学などのこの時期の動きを、より立体的に把握することが可能となる。9のグループに挙げた文献は、そのような理解に役立つもののいくつかである。

10 個人別伝記など

- 88) 白川宣力『川上音二郎・貞奴 新聞に見る人物像』(雄松堂出版、1985)
- 89) 山口玲子『女優貞奴』(朝日新聞社、1993)
- 90) 平川祐弘「太田花子の自傳」『鷗外全集』第7巻月報pp.4-9。(岩波書店、1972)
- 91) 巖谷栄二「年譜 巖谷小波」『明治文学全集20 川上眉山 巖谷小波集』(筑摩書房、1968) pp.403-410
- 92) 近代文学研究室「巖谷小波」『近代文学叢書第35巻』(昭和女子大近代文学研究室、1972) pp.17

-194

- 93) 巖谷小波『洋行土産』上下2巻 (博文館、1903)
- 94) 巖谷大四『波の登音 巖谷小波伝』(文芸春秋社、1993)
- 95) 松本正著・大分県立先哲資料館編『瀧廉太郎』(大分県教育委員会、1995)
- 96) 小長久子『瀧廉太郎』(吉川弘文館、1968)
- 97) 斎藤茂太『精神科医三代』(中央公論社、1971)
- 98) 嶋田謹二『ロシアにおける広瀬武夫』上下 (朝日新聞社、1976)
- 99) 砂川幸雄『森村市左衛門の無欲の生涯』(草思社、1998)
- 100) 玉井喜作『シベリア隊商紀行』小林健祐訳『世界ノンフィクション全集47』(筑摩書房、1963)
pp.185-287
- 101) 湯郷将和『キサク・タマイの冒険』(新人物往来社、1989)
- 102) 大島幹雄『シベリア漂流 玉井喜作の生涯』(新潮社、1998)
- 103) 新村俊武「ドイツで健筆・国際ジャーナリスト 玉井喜作」産経新聞「日本人の足跡」取材班編『日本人の足跡三 世紀を越えた「絆」求めて』(産経新聞ニュースサービス、2002)
pp.255-286

このような人名注解においては、個人的伝記に関する文献は非常に多く存在するが、ここでは本稿で特に参考にしたもののみを挙げた。100の『シベリア隊商紀行』は、玉井喜作の著作の中で唯一邦訳されたものである。

II. 人名注解；日本人編

【凡例】

1. 基本的には昨年度の「人名注解；外国人編」と同じであり、以下要点のみ記しておきたい。
生没年不詳の場合は()とした。またどちらか不詳の場合は、(1889-)のように不詳の年数を空白のままにしておいた。
2. 生没年の後のNo.を付けた数字は、『Ost=Asien』の通巻号数であり、その号に当該人物名が論文などの筆署名として、あるいは論文などのタイトルの中に現れることを示す。通巻号数は拙稿、『『Ost=Asien』研究—その1. 全目次—』(上記参考文献番号35) p.110を参照されたい。
3. 『Ost=Asien』からの引用に関する当該号数の表記の仕方は、原則として、巻号表示によらず、通巻号数(西暦年号・刊行月)で示すことにした。和暦を表示した方がわかりやすい場合は、それを西暦年号の次に入れた。例：『Ost=Asien』No.36(1901年3月号)、または『Ost=Asien』No.36(1901年(明治34)3月号)。
4. I章の参考文献と一部重なる部分もあるが、各項目を書くにあたって特に詳しく参照した文献に関しては、各項目の最後に[参考文献]として記入した。

5. 以下の人名注解においては、その事典的性格と各項目の独立性、また読みやすさを考慮し、注は付けずに、引用文献は著者名と文献名とページ数を直接各項目の中に記入した。その際出版社・出版年などの書誌的データは、(I-35)のように記して、参考文献の章の文献番号を指示することにした。(I-35)はI章の35番の文献参照の意味である。

【あ】

青木周蔵 (1844-1914) No.2

外交官、官僚政治家。山口県出身。1868年(明治1)に医学の研究目的でプロシアに留学したが、1870年冬学期から1873年夏学期までの間は、ベルリン大学に在籍してグナイスト, R.v. のもとで政治学を学んだ。その後1874-1879年(明治12)には2週間あまりのドイツ代理公使の後、同公使を務める。さらに1880-1885年(明治18)と1892-1897年(明治30)にもドイツ公使を務めた。1882年(明治15)、伊藤博文が憲法と議会制度などの調査でベルリンを訪れた時には、青木は恩師であるグナイスト, R.v. 教授を伊藤に紹介している。1898年に帰国した後、外相、アメリカ公使(1906)なども務めた。修学時代と外交官時代を合わせてドイツ滞在は23年間になり、その間ドイツの諸制度の日本への移植に尽力した。

足立文太郎 (1865-1945) No.99

解剖学者、人類学者。静岡県出身。帝国大学医科大学(現東京大学医学部)で解剖学を専攻し、卒業後、岡山医学校(現岡山大学医学部)教授を経て、ドイツに留学した。1904年(明治37)より京都帝国大学医科大学教授となる。日本人を対象とした解剖学的研究の先駆者であり、皮膚、筋肉、内臓、血管などの軟部組織に関する詳細な研究を行い、とりわけヨーロッパ人と日本人の人種的相違を解明した。ドイツ語による著作『日本人の動脈系』(1928)、『日本人の静脈系』(1933)などを著す。1930年(昭和5)に学士院恩賜賞受賞。作家の井上靖は娘婿。

足立やそ (-) No.99

解剖学者、人類学者足立文太郎の妻。

姉崎正治 (1873-1949) No.38

宗教学者、評論家。京都府出身。1896年(明治29)に東京帝国大学哲学科を卒業後、ドイツ、イギリス、インドに留学した。ベルリン大学には1901年夏学期から1901年冬学期まで在籍し、哲学を専攻している。1904年(明治37)東京帝国大学教授となり、翌年東大に最初の宗教学講座が開設され、その主任教授となる。宗教の実証主義的研究に新機軸を出し、多数の門下を育て、1930年(昭和5)には日本宗教学会を設立した。また嘲風と号し、高山樗牛らと雑誌『帝国文学』を創刊したのをはじめ、文明評論も行い、一般にはむしろ明治の文人として知られている。本稿p.55の写真の3列目左端に写っている人物が姉崎正治である。

1902年(明治35)8月末、病のために帰国する滝廉太郎の船はロンドンに寄港した。この時、滞欧中の姉崎は、「荒城の月」の作詞者土井晩翠とともに滝を見舞っている。そして当時29歳の姉崎

は、23歳の滝に、ヴァーグナー,R.の『ニーベルングの指輪』のピアノスコアを記念に贈った（小長久子『滝廉太郎』（I-96）pp.236-240）。

栗屋幹（ - ） No.31

陸軍軍人。義和団事件（1899-1901）の折、歩兵第11連隊を率いた。

【い】

石黒忠憲（1845-1941） No.103

日本の軍医界に貢献した医者。福島県出身。1865年（慶応1）医学所（東京帝国大学医学部の前身）に入り西洋医学を修める。1870年大学東校の大学少助教、1879年（明治12）東京大学医学部総理心得となる。1871年以降陸軍にも関係し、1890年（明治23）陸軍軍医総監となる。日露戦争時には傷病兵の救護などに貢献した。陸軍軍医制度の基礎を築き、近代医学教育、看護婦養成などにも尽力し、退職後は日本赤十字社社長、貴族院議員などを務めた。

伊集院五郎（1852-1921） No.109

海軍軍人。鹿児島県出身。1882年（明治15）イギリスに留学し航海術、砲術を学ぶ。1902年（明治35）常備艦隊司令長官となり英国皇帝戴冠式に参列し、日露戦争時（1904-1905年）には大本営付参謀を務めた。また1907年には筑波、千歳の2艦とともに米欧を歴訪している。

泉谷氏一（ - ） No.70

慶応義塾卒業。光村利藻が1901年（明治34）に創設した関西写真製版印刷合資会社（現光村印刷株式会社）の社員。軍艦および重工業に使用するボイラーの研究のためにドイツに派遣された。しかしちょうどその頃、欧米から三色版印刷による印刷物がさかんに日本に入ってきたので、研究対象をその新しい印刷術に変更した。ベルリンの玉井家の『寄せ書き』（I-34）には、1901年（明治34）2月26日と1902年10月25日（玉井喜作の三女文子の11歳の誕生日祝賀）に泉谷氏一の署名がみられる。

市川代治（ - ） No.78-82, 86, 88, 99, 106-110

ベルリン大学に1900年（明治33）から1908年（明治41）まで通算8年間在籍した。1900年夏学期から1904年夏学期までは哲学を、また1904年夏学期から1908年夏学期までは国民経済学をそれぞれ専攻している。また1905-1908年の間は、同時にベルリン大学付属ベルリン東洋語学校（Seminar für Orientalische Sprachen zu Berlin）の日本語講師も務めた。その間『Ost=Asien』誌には、「日本と対ロシア戦争」「黄禍」「日本における鉄砲の伝来」「日本における最初のアメリカ軍艦」「国際政治学者の目から見た東アジア」などのエッセイ、論文を発表している。

また玉井家の『寄せ書き』（I-34）の1905年（明治38）2月26日付のページには、「御嬢様に御健康を祈る 市川代治」という直筆を残している。『寄せ書き』によれば、この日は玉井喜作のシベリア経由ベルリン到着12周年記念日ということで（実際には11年目に当たるのであるが、数え年の計算をしたものか、あるいは単なる計算間違いか）、ベルリン在住の玉井の知人達が玉井家に集い、食卓を囲んで歓談し、それぞれがこの『寄せ書き』に直筆を残している。

ハルトマン,R.のベルリン大学日本人学生在籍名簿（I-33）と『寄せ書き』を照らし合わせてみると、この直筆の面々は、当時ベルリン大学で学んでいた堀光亀（1876-1940、財政学専攻、1904年夏学期-1906年冬学期在籍）、松岡均平（1876-1960、国民経済学専攻、1904年冬学期-1907年冬学期在籍）、乙竹岩造（1875-1953、教育学専攻、1904年夏学期-1906年冬学期在籍）、服部教一（1872-1956、国家学専攻、1905年夏学期-1906年夏学期在籍）、中村健一郎（1869-1940、文学専攻、1903年夏学期-1904年夏学期在籍）などであったことがわかる。

下の写真は『Ost=Asien』No.111（1907年（明治40）8月号）p.113に掲載されたものである。後列左端が市川であり、同僚の教師2人と修了試験を受けた学生4人が一緒に写っている。



伊藤博文（1841-1909）No.6, 9-10, 13, 31, 40, 43-44, 46, 77, 135-136

藩閥政治家。山口県出身。明治憲法下において、天皇制に基づく絶対主義的体制を確立した。1863（文久3）-1864年にイギリスへ留学して以降、1871（明治4）-1873年には岩倉使節団の副使として米欧を視察した。また1882（明治15）-1883年にはドイツ、オーストリアで憲法調査を行い、特にプロイセンの憲法学説から、憲政下においても絶対主義的君権を確保する方法を学んだ。1885-1901年（明治34）の間に内閣を4度組閣し、日露戦争時には元老として最重要政策に関与した。1909年（明治42）にハルビンで暗殺された。

稲垣満次郎 (1861-1908) No.125

外交官。長崎県出身。中村正直(敬字)の私塾同人社で英学を修めた後、イギリスに渡りケンブリッジ大学に学ぶ。1897年(明治30)タイ(シヤム)公使館開設とともに弁理公使となり、1899年には同公使館の公使となった。その後1907年にスペイン公使となるが、翌年任地で病気のために死去した。

井上勝之助 (1861-1929) No.3, 59, 65, 69, 104, 112

外交官。第一次伊藤博文内閣の外相を務めた井上馨の甥。1871-1879年(明治12)の間イギリスに留学し法学を学ぶ。帰国後大蔵省に出仕し、日本銀行に勤務した。1886年(明治19)に外務省の外務書記官となり、以後1886-1887年と1891-1892年はドイツ臨時代理公使、1898(明治31)-1906年(明治39)の間はドイツ公使を務めている。1898年は『Ost=Asien』が創刊された年であり、1906年はそれを刊行した玉井喜作が亡くなった年である。この間1904-1905年には日露戦争が起こっている。つまり井上勝之助のドイツ公使時代は、玉井が『Ost=Asien』を刊行していた時期とちょうど重なっている。なお日露戦争後の1906年には、同公使館が大使館に昇格しており、井上は続いて1906-1907年にはドイツ大使を務めた。

井上末子 (1864-) No.8, 25

外交官井上勝之助の妻。井上馨の娘。

巖谷小波(季雄)(漣山人)(1870-1933) No.38, 40, 53-55, 98-99, 101-102

作家、児童文学者。本名季雄、別号漣山人。1887年(明治20)文学結社硯友社に入り、尾崎紅葉らと交友を深め小説を発表し始める。1888年獨逸学協会学校を卒業。1891年(明治24)に博文館『少年文学叢書』の第1編として『こがね丸』を出版したが、これが近代日本児童文学史を切り開く作品となった。1894年に博文館編集部に入社し、雑誌『少年世界』の主筆となり、その後児童文学創作、伝承文学の再話、童話口演などを行った。

1900-1902年(明治35)には、ベルリン大学付属ベルリン東洋語学校の日本語講師を務めた。これは、ベルリン大学東洋語研究所で「日本昔噺」が教材に取り上げられたことがきっかけとなり、当時ドイツ公使であった井上勝之助の助力もあって実現したものであった。この2年間は、ベルリン東洋語学校で日本語講師をしながら、ベルリンの和独会の一員として、種々の催し物に積極的に参加している。巖谷のベルリン着は1900年(明治33)11月であるが、1901年1月には、ベルリン在住の俳句同好の邦人とともに白人会を発起し、自ら宗匠を務めている。そのメンバーには美濃部達吉(法学)、芳賀矢一(国文学)、公使館書記官盧百寿などがいた。

次の頁の写真は、その白人会結成から3ヶ月後、1901年(明治34)4月8日にベルリンで花祭りを行った時のものである。これは『Ost=Asien』No.38(1901年5月号)p.65に掲載された写真であるが、同号には、宗教学者姉崎正治が「花祭りの意義」について、また児童文学者巖谷が「花祭りについての物語」を寄稿している。写真前列左から2人目が巖谷(31歳)であり、3列目左端が姉崎正治(28歳)、その右隣が玉井喜作(35歳)、また2列目右から二人目が法学者の美濃部達吉

(28歳)、その左隣が独文学者の藤代禎助(33歳)である(括弧内はこの時の各人の年齢)。



花祭りの翌月、1901年(明治34)5月19日には、巖谷は、ベルリンに到着した留学生滝廉太郎をホテル・ベレヴューに訪ねている。滝とは『幼稚園唱歌』作成以来の知己であった。この年の3月30日に、滝の「荒城の月」「箱根八里」「豊太閤」を含む『中学唱歌』が出版され、その1週間後の4月6日に、滝はドイツに向けて出発している。その出発直前に出版社に手渡されたのが『幼稚園唱歌』であり、これは同年7月に出版された。この曲集は、幼児に口語体の歌を提供したもので、当時としては画期的な企画であった。この中には、今日でも親しまれている滝の「お正月」「水あそび」などが含まれている。滝は、この曲集の歌詞の創作に関して巖谷に相談しているのだが、両者の関係はそれ以来のものであった。滝は7月に出版されたこの『幼稚園唱歌』を、ライプツィヒからベルリンの巖谷に礼状と共に送っている。

年が明けて、翌1902年(明治35)3月16日には、ライプツィヒで幸田幸の箏曲の演奏が行われた。巖谷もベルリンからこれを聴きに来たが、この時滝はすでに病院に入院していた。滝は同年10月17日に帰国しており、巖谷は同年10月30日に帰国しているので、両者の帰国はほぼ同時期であった。なお、ベルリン東洋語学校時代の教え子であり、ベルリン大学法学部学生であったルドルフ・ブットマンは、後に駐日ドイツ領事館の領事として来日し、巖谷を親しく訪ねている。

〔参考文献〕 巖谷小波『洋行土産』(I-93上) pp.294-7、巖谷大四『波の登音-巖谷小波伝』(I-94) pp.145-146、小長久子『滝廉太郎』(I-96) pp.135-176、松本正著・大分県立先哲資料館編『瀧廉太郎』(I-95) pp.220-221、『近代文学叢書第35巻』(I-92) pp.18-25、『明治文学全集20 川上眉山 巖谷小波集』(I-91) pp.403-410

【う】

宇佐美濃守 (-) No.115-121, 124, 126-129

ベルリン大学に、1905年(明治38)から1911年(明治44)まで通算6年間在籍した。1905年夏学期から1909年の夏学期まではドイツ語学を、また1909年夏学期から1911年冬学期までは歴史学をそれぞれ専攻している。さらに第一次世界大戦が勃発した1914年(大正3)には、ベルリン大学付属ベルリン東洋語学校の日本語講師となっている。その間『Ost=Asien』誌に、森鷗外の『舞姫』の独訳を全12回にわたって掲載した。初回は1908年(明治41)1月号No.115であり、最終回は1909年(明治42)4月号No.129である。

森鷗外(1862-1922)は、1881年に20歳の若さで東京大学医学部を卒業し、1884年(明治17)から1888年までドイツに留学した。『舞姫』は、帰国後『国民の友』第6巻69号(1890年(明治23)1月3日発行)の付録に、鷗外森林太郎の署名で発表された。従って、その掲載からわずか18年後に、この作品がドイツ語圏に紹介されたことになる。当時としては、異例の早さでの日本文学紹介であったと言える。因みに、『舞姫』冒頭のウンター・デン・リンデンの通りの様子は、第2回目に次のように訳されている(No.116、1908年2月号、p.348)。

車道の土瀝青の上を音もせで走るいろ／＼の馬車、雲に聳ゆる樓閣の少しとぎれたる處には、晴れたる空に夕立の音を聞かせて漲り落つる噴井の水、遠く望めばブランデンブルク門を隔てて緑樹枝をさし交はしたる中より、半天に浮び出でたる凱旋塔の神女の像、この許多の景物目睫の間に聚まりたれば、始めてこゝに來しもの、應接に遑なきも宜なり。

Verschiedene Wagen gleiten auf dem Asphalt des Fahrweges geräuschlos vorüber. Wo die Reihen der bald bis zu den Wolken strebenden Gebäude unterbrochen sind, dort steigt eine Fontäne zu dem hellen Himmel empor, mit dem Rauschen des Gewitters, zerstäubend fällt das Wasser zurück. Die Viktoriafigur auf der Siegessäule, fast halb in den Himmel schwebend, sieht man hinter dem Brandenburger Tor von den gekreuzten grünen Bäumen sich abheben von weitem. Wer zum ersten Mal hierher kommt, kann wirklich nicht auf einmal diese verschiedenen Anblicke in sich aufnehmen.

内田康哉(1865-1936) No.111

外交官。政治家。熊本県出身。1887年(明治20)に帝国大学法科大学(現東京大学法学部)を卒業後、外務省に入省した。清国公使、外務次官、オーストリア大使(1907-1909)、アメリカ大

使（1909–1911）、ロシア大使（1916–1918）などを歴任している。また1911年（明治44）に第二次西園寺公望内閣の外相となって以降、原敬、高橋是清、加藤友三郎、齋藤実の各内閣でも外相を務めた。

【お】

老川茂信（1883– ）

老川茂信の名前は目次には出てこないが、『Ost=Asien』に深く関わる人物なので、今回の人名注解に掲載した。老川は1883年（明治16）生まれの富山県人で、ドイツに留学し、1904年冬学期から1907年夏学期までベルリン大学に在籍して法学を学んでいる。玉井よりも17歳年下で、開始時期は不明であるが、いつのころからか玉井のもとで『Ost=Asien』の刊行を手伝っていたようである。玉井喜作没後は『Ost=Asien』を引き継ぎ、102–139号（1906年11月号–1910年2月号）を刊行した。本稿p.64の写真の右端に写っている人物が老川茂信である。

太田花子（1868?–1945） No.117–118

日本人の演劇団を組織して欧米を約20年間巡演し、1922年（大正11）に帰国。77歳で死去した。オーギュスト・ロダン（1840–1917）と太田花子は、1906年（明治39）から約10年近くの交際があり、彼女はロダンのモデルともなっている（「ハナコの顔」「ハナコのマスク」）。森鷗外はその様子を、創作を交えて短編『花子』（1910）として描いた。

大村仁太郎（1863–1907） No.50, 52–53, 56, 60–61, 110

ドイツ語教育学者。1885年から陸軍大学校、東京大学予備門、第一高等中学校の教授を務め、翌1886年（明治19）に学習院教授となる。1890–1903年の間は獨逸学協会学校でもドイツ語を教え、1903–1907年（明治40）には同学校第4代校長を務めている。この間1894–1899年（明治32）には、日本人向けのドイツ語教科書や、ドイツ語普及のための雑誌である『獨逸語學雑誌』を発刊した。

また1901–1903年（明治36）にはドイツに留学し、1901年冬学期から1902年夏学期までベルリン大学に在籍して教育学を学んでいる。この時ヨーロッパに向かう船には滝廉太郎も同乗しており、大村と共に写した次の頁の写真が残されている。前列中央が大村仁太郎、その右隣が滝廉太郎。留学中の獨逸学協会学校の焼失（1901）に由来する日独交流に関しては、拙稿「『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—」（I–36） pp.67–69を参照されたい。右の写真は、大村が亡くなった折、『Ost=Asien』 No.110（1907年7月号）



p.66に追悼記事とともに掲載されたものである。[参考文献] 獨協学園百年史編纂室編『獨協百年』第3号 (I-41) pp.438-451、小長久子『滝廉太郎』(I-96) pp.189-191



獨協学園百年史編纂委員会編『目でみる獨協百年』(獨協学園、1983) p.61より

奥村五百子 (1845-1907) No.106

愛国婦人会の設立者。佐賀県出身。1900年に慰問使として義和団事件を見聞し、帰国後1901年(明治34)に、軍事後援を目的とする婦人団体である愛国婦人会を結成した。

織田万 (1868-1945) No.50-51, 53, 55, 57

日本における体系的行政法研究の創始者。佐賀県出身。1892年に東京帝国大学法科大学仏法科を卒業し、1895年(明治28)から1900年までドイツ、フランスに留学した。帰国後京都帝国大学法科大学教授となり、初代の行政法講座担当者となる。在任中、1921年(大正10)から1930年(昭和5)まで、ハーグの常設国際司法裁判所判事も務めている。京都帝国大学退官後、立命館大学名誉総長、貴族院議員なども務めた。

【か】

加藤高明 (1860-1926) No.37

外交官、政治家。愛知県出身。1881年(明治14)に東京大学を卒業後、1883-1885年にイギリスへ留学した。1895-1899年にはイギリス公使を務め、1900年(明治33)に第4次伊藤博文内閣の外相に就任した。以後政界に転じて外相を数度経験し、イギリス大使(1909-1913)などを務めた後、大正末に2度の加藤高明内閣を組閣した(第一次1924-1925、第二次1925-1926)。

金杉英五郎（1865—1942） No.121

医者。千葉県出身。1887年（明治20）に東京帝国大学医科大学別科を卒業。1887—1892年ドイツに留学して耳鼻咽喉科を専攻し、博士の学位を取得後、ヴェルツブルク大学耳鼻咽喉科助手となる。帰国後東京耳鼻咽喉科医院を開設し、また東京慈恵医院医学校（現東京慈恵会医科大学）の耳鼻咽喉科の講座を担当した。1920年（大正9）に獨逸学協会学校第7代校長となり、1921年には東京慈恵会医科大学の初代学長となった。また1917年に衆議院議員、1922年には貴族院議員となっている。

上村彦之丞（1849—1916） No.79, 88

海軍軍人。鹿児島県出身。日露戦争時は第二艦隊司令長官として、日本海でロシアの艦隊と戦った。

川上音二郎（1864—1911） No.29, 45—46

Die Kawakami-Truppe (Sada Yakko) in Berlin.



Otojiro Kawakami.



Frau Kawakami, Sada Yakko.

俳優。福岡県出身。14歳で上京し種々の職業を転々とした後、壮士芝居に刺激を受けて、1890年（明治23）に書生芝居を旗揚げした。翌1891年に東京の中村座で『板垣君遭難実記』を演じ、幕間には自由民権思想を鼓吹した「オッペケベ節」を上演して人気を博した。1893年にはフランスへ演劇視察に出かけている。また1899—1902年（明治35）の4年間の間に2度、妻の川上貞奴らとともに欧米に出かけ、『芸者と武士』『左甚五郎』などを演じた。晩年は興行師として過ごし、1911年大阪の帝国座で病没した。上の写真は、『Ost=Asien』No.45（1901年12月号）p.394に掲載

された川上音二郎と川上貞奴の写真である。この年、11月18日から12月7日までベルリンで公演を行っているの、その折に撮影されたものと思われる。

川上貞奴 (1871-1946) No.49, 117

女優。1887年(明治20)東京・日本橋の芸者となる。1894年(明治27)に、書生芝居を率いる川上音二郎と結婚し、芸者を廃業した。1899年4月から1901年(明治34)1月まで、川上一座はアメリカとヨーロッパを巡演し、その間1900年の7月から11月にかけては、パリの万国博覧会に出演している。また1901年4月から1902年8月までは、再度渡欧してヨーロッパ各地を巡演した。さらに1907年7月から1908年(明治41)5月にかけては、劇場視察と女優養成学校研究のためにフランスに渡り、帰国した年の9月に帝国女優養成所を創設した。1917年(大正6)に引退後は「川上児童劇団」などを結成し、1932年(昭和7)までその経営にあたった。[参考文献] 上坂樹「ブッチーニをも魅了した? ~貞奴の肉声、100年ぶり再生」(朝日新聞、2003年9月2日)

河原林檎一郎 (1874-) No.72, 74

東京専門学校(現早稲田大学)を卒業後、財政、金融の研究のために私費留学でドイツに渡った。1901年(明治34)冬学期から1904年冬学期までベルリン大学に在籍し、財政学を専攻している。帰国後は、三井物産勤務などを経て早稲田大学教授を務めた。

閑院宮 [載仁] (1865-1945) No.27

軍人。1882-1891年(明治24)フランスに留学し、フランス陸軍大学を卒業。日露戦争時は第一師団長を務めた。

【き】

菊池大麓 (1855-1917) No.111

数学者。洋学者箕作秋坪の次男。日本に初めて本格的な西洋の数学を紹介した。1866-1868年及び1870-1877年(明治10)の2度イギリスに留学し、1877年にケンブリッジ大学を卒業した。同年帰国後すぐに、その年の6月に創設された東京大学理学部教授となる。以後東京帝国大学総長(1898)、文部大臣(1901)、京都帝国大学総長(1908)などを歴任した。右の写真は、『Ost=Asien』No.111(1907年(明治40)8月号)p.99に掲載されたものである。これは1907年5月1日にウィーンで撮影さ



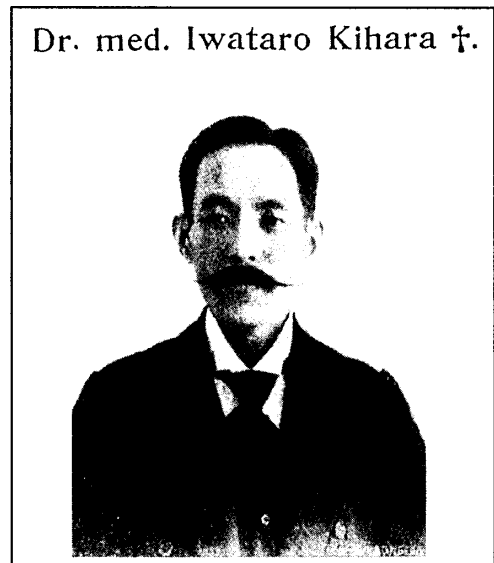
れたものであり、左から3人目が菊池であり、右端は国史学者の重野安繹である。

北里闌（一） No.33-34, 45

大阪府出身。1900年（明治33）頃ライプツィヒに居住し、ドレスデンのカール・ライスナー出版社から戯曲『フミオ』を出版した。『Ost=Asien』No.33, 34（1900年12月号、1901年1月号）には、それに対する書評が掲載されており、これは『ハンブルク通信員』誌からの転載である。No.33, p.408によれば、この戯曲は1901年1月に、ベルリンのライヒェンベルガー通りにあるルイーゼ劇場で公演予定となっている。帰国後、学習院大学科に1903-1905年の期間勤務した。1904年（明治37）に学習院大学科教授となっているが、専門は不詳である。

木原岩太郎（1867? -1900） No.32, 44

医者。山口県出身。1894年（明治27）に帝国大学医科大学（現東京大学医学部）を卒業後、1898年に大学院に入学した。1900年の夏、耳鼻咽喉科学研究のため文部省からドイツに派遣されたが、同年10月7日に、妻と二人の子供を残してベルリンで病気のために死去した。享年33歳。帰国後の彼には、新設の京都帝国大学教授のポストが約束されていたこともあり、ベルリン在住の邦人の有志は、彼への香典などをもとに、京都帝国大学に病理学、喉頭学、耳疾などの専門書を、木原岩太郎博士記念として寄贈した。右の写真は『Ost=Asien』No.32（1900年11月号）p.366に掲載されたものである。[参考文献]



「木原岩太郎博士没」『Ost=Asien』No.32、「木原[岩太郎]博士に対する寄付金の決算」『Ost=Asien』No.44

清浦奎吾（1850-1942） No.74

政治家。熊本県出身。山県有朋系官僚政治家の中心人物。1891年（明治24）貴族院議員、1896年第二次松方正義内閣の法相などを務め、1906年（明治39）枢密顧問官、1922年枢密院議長となる。1924年（大正13）には組閣するが、第2次護憲運動が起こり、護憲3派に破れて政治生命を閉じた。

【く】

久邇宮 [邦彦]（1873-1929） No.118-119, 124, 126-127

軍人。1902年陸軍大学校卒業。1907年（明治40）から数年間ヨーロッパに駐在した。

黒木為楨（1844-1923） No.78

軍人。鹿児島県出身。1903年（明治36）大将となり、日露戦争時は第一軍司令官を務める。

【こ】

児玉源太郎（1852-1906） No.98

陸軍軍人。山口県出身。1887年(明治20)陸軍大学校校長となり、お雇い外国人メッケル,K.W.J.とともに軍備・戦術の近代化を図り、参謀養成教育を確立した。1898(明治31)－1906年の間台湾総督の座にあり、この間陸軍大臣(1900－1902)、内務大臣(1903)、文部大臣(1903)も兼任した。日露戦争時は満州軍総参謀長を務める。

コデラ (-) No.103

「十五夜の月」の作者。これは『Ost=Asien』1906年(明治39)12月号に掲載されたものであり、この時期にヨーロッパにいたコデラ姓の人物として、小寺謙吉(1877－1949)の可能性が考えられる。小寺は神戸商業学校卒業後、1897年(明治30)に渡米しエール、コロンビア、ジョンズ・ホプキンスなどの大学で法律・政治学を学んだ。1902年には渡欧して、ハイデルベルク大学とウィーン大学で国際法を学んでいる。さらに1906年には再度渡欧し、ジュネーブ大学に在籍した。もし「十五夜の月」の作者が小寺謙吉であれば、この最後の渡欧の時期のものであろう。なお、小寺はその後衆議院議員、神戸市長などを務めた。

後藤新平(1857－1929) No.55－58

官僚、政治家。岩手県出身。1898－1906年(明治39)の間台湾総督府民政局長、1906年南満州鉄道会社初代総裁となる。以後逋信大臣、内務大臣、外務大臣、東京市長などを歴任した。近代日本の帝国主義確立期における典型的な政治家の一人と目される。

小林源蔵(1867－1921) No.83

山形県出身。1894年(明治27)帝国大学法科(現東京大学法学部)卒業後鉄道事務官となり、1902年(明治35)に欧米各国の鉄道事務を視察した。日露戦争(1904－1905)の折、佐渡丸に乗船した際にロシア艦隊に襲撃され、2年間ロシアで捕虜として過ごす。1906年に帰国して鉄道理事となり、1912年には衆議院議員となった。

【さ】

西園寺公望(1849－1940) No.95

公卿出身の政治家。1870－1880年(明治13)の間フランスに留学し、ソルボンヌ大学に学び法学士となる。この間、1878年にはパリで万国博覧会が開催されている。1867年のパリ万国博覧会の頃より次第に高まっていったジャポニスムは、西園寺在仏中の10年間に一層高揚することとなった。この時期西園寺は、林忠正、ゴンクール兄弟、ゴーチエ,J.、音楽家リスト,F.、後のフランス首相クレマンソー,G.B.などと親交を結んでいる。

帰国後、1882年には、国会開設の準備でヨーロッパをめぐる伊藤博文に随行して再び渡欧し、1885－1887年にはオーストリア公使、1887－1891年(明治24)にはドイツ公使を務めている。1894年第2次伊藤博文内閣の文部大臣に就任して以降は、天皇制政権の中枢で、立憲政治の確立、維持に努めた。

斎藤紀一(1863－1928) No.134

医者。脳神経・精神病学専攻。山形県出身。1886年(明治19)に山形県立医学校を卒業し、1888

年（明治21）に東京で開業する。1899－1903年にはドイツに留学。1901年（明治34）夏学期から1902年夏学期までベルリン大学に在籍（医学専攻）し、医学博士の学位を取得した。帰国後、1903年に東京で青山脳病院を開設する。その後1908年－1910年（明治43）には再び渡欧し、欧州各地の病院を訪れている。1917（大正6）には衆議院議員となった。『Ost=Asien』No.134（1909年（明治42）9月号）の論文「日本とアメリカの精神病について」は、2度目の渡欧の折に寄稿したものである。斎藤紀一は斎藤茂吉の義父であり、斎藤茂太（医師・評論家）、北杜夫（作家）兄弟の祖父にあたる。[参考文献] 北杜夫『楡家の人びと』（新潮社、1964）

斎藤仙也（1854－ ） No.33

医者。1882年（明治15）東京医科大学を卒業し、1884年に京都府立療病院内科医長となった。1900年（明治33）からフランス、ドイツに留学。1900年夏学期から1902年夏学期まではベルリン大学に在籍し、医学を専攻している。後に京都府医師会会頭などを務めた。

佐倉宗吾（－ ） No.50

17世紀後半頃の義民の代表者とされ、歌舞伎にも「東山桜莊子」（通称「佐倉義民伝」「佐倉宗吾」）、1851年江戸中村座で初演）として舞台化されている。

ササキ マサハル（－ ） No.130, 137

【し】

志賀潔（1870－1957） No.101

細菌学者。赤痢菌の発見者。1896年（明治29）に東京帝国大学医科大学細菌学科を卒業し、北里柴三郎の伝染病研究所に入所する。1897年12月に赤痢病原菌を発見して細菌学雑誌に発表し、翌年その要点をまとめた論文（ドイツ語）を世界に発表した。1901年（明治34）から1905年までドイツに留学し、フランクフルト・アム・マインのエルリヒ、P.のもとで生物化学、免疫学、化学療法などを研究した。帰国後、1914年（大正3）に、所属する内務省伝染病研究所が文部省に移管された際、北里と行動を共にして同研究所を辞職し、新設の北里研究所に移った。その後慶應義塾大学医学部教授や京城帝国大学教授などを歴任し、1944年には文化勲章を受章した。

重野安繹（1827－1910） No.111

国史学者。漢学者。鹿児島県出身。『Ost=Asien』No.111の目次ではAneki（あんえき）と音読みで表記されているが、正しくは「やすつぐ」。薩摩の藩校造士館や江戸の昌平黌で学んだ後、1871年（明治4）文部省に入省した。その後修史局副局長、修史局編修長などを経て、1888年（明治21）帝国大学文科大学（現東京大学文学部）教授となり、史料収集と史料批判を基礎とした近代史学の確立に尽力した。1889年には史学会が創設されて初代会長となり、1890年に貴族院議員となった。1907年（明治40）にウィーンで開催された万国学士院総会には、帝国学士院を代表して出席している。本稿60ページの写真は、その時のものである。また次の頁の写真は、その折ベルリンに立ち寄った時のものであり、『Ost=Asien』No.110（1907年7月号）p.65に掲載された。右から二人目が重野安繹であり、右端が玉井喜作の没後『Ost=Asien』を引き継いで発行した老川茂信

である。



白石葭江 (1873-1904) No.31

海軍軍人。1900年に義和団事件で出征。1904年(明治37)日露戦争の折、第三次旅順港口閉塞作戦で戦死した。

白井光太郎 (1863-1932) No.39

植物学者。福井県出身。1886年(明治19)東京大学理学部植物学科を卒業。卒業論文では東京とその周辺の蘚類の調査分析を行ったが、これは日本における蘚類の学術的研究の先駆けと評価されている。その後ドイツに留学し、1899年(明治32)冬学期から1901年冬学期までベルリン大学に在籍して植物病理学を研究した。帰国後、1907年(明治40)に東京帝国大学農科大学教授となり、1925年(大正14)に退官している。森林植物学の開拓にも貢献し、また植物学と文化とを結びつける著作活動においても業績を残している。『日本博物学年表』(1891)、『植物病理学』(1903)、『植物妖異考』(1925)、『植物渡来考』(1929)などの著書がある。

【せ】

関場不二彦 (1865-1939) No.14, 16

外科医、歴史学者。福島県出身。札幌病院長を務めていた時に、1898年夏学期から同年冬学期

までベルリン大学に在籍して医学を学んだ。

【た】

大正天皇（1879—1926） No.24

在位1912—1926年。名は嘉仁。

高平小五郎（1854—1926） No.128

外交官。岩手県出身。開成学校卒業後、1873年（明治6）工部省に出仕、1876年外務省に転じる。その後オランダ、デンマーク兼任公使（1892（明治25）—1894）、イタリア公使（1894—1896）、オーストリア、スイス兼任公使（1896—1899）、アメリカ公使（1900—1905）、アメリカ大使（1908—1909）などを歴任する。1905年（明治38）9月、日露戦争後のポーツマス条約調印に際しては、小村寿太郎外相とともに全権委員を務めた。

立花銃三郎（1867—1901） No.58

教育学者。福岡県出身。帝国大学（現東京大学）で教育学を専攻した後、1892（明治25）—1901年の間学習院教授を務める。この間、1896年にはダーウィン、C.R.の『種の起源』（1859年）を日本で初めて翻訳し、『生物始源（一名種源論）』として出版した。またイギリスとドイツに留学し、1899年冬学期から1900年夏学期まではベルリン大学に在籍して教育学を研究している。1901年、常陸丸に乗船して帰国の際、5月8日に沖縄沖で病気のため死去した。[参考文献] 渡辺正雄「明治初期のダーウィニズム」平川祐弘他編『講座比較文学第5巻』（東京大学出版会、1973）pp. 83—107、渡辺正雄『日本人と近代科学』（岩波書店、1976）pp. 105—131

玉井韶子（1889—1905） No.92

『Ost=Asien』発行者玉井喜作の次女。玉井喜作が札幌農学校（現北海道大学）のドイツ語の教授をしていた1889年（明治22）に、札幌で生まれる。喜作は1894年にベルリンにたどり着くが、家族はかなり遅れて、8年後の1902年（明治35）に到着した。次女韶子もその時から母エツ・妹文子とともにベルリンで生活し始めるが、わずか3年後の1905年（明治38）に病気のため死去した。シュテルン、A.による韶子への追悼記事に関しては、拙稿「『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—」（I—36）pp.64—65参照。

玉井喜作（1866—1906） No.13, 14, 18—21, 23, 87—88, 91—92, 99, 102, 123

『Ost=Asien』の創刊者。山口県出身。1888（明治21）—1891年の間札幌農学校（現北海道大学）のドイツ語の教授を務めた後、1892年（明治25）11月から1894年2月までの1年4ヶ月をかけ、シベリアを横断してベルリンに行く。そ



の体験を1898年(明治31)に、『Karawanen-Reise in Sibirien西比利亜征槎紀行』(Berlin: Karl Siegismund, 1898)としてドイツ語で出版した。この本は65年後の1963年(昭和38)に、小林健祐訳『シベリア隊商紀行』(I-100参照)として日本でも出版されている。また1898年4月からドイツ語の月刊総合雑誌『Ost=Asien』を刊行し始めるが、No.101号(1906年(明治39)8月号)まで出したところで病気のために死去した。前ページの写真は、『Ost=Asien』No.102(1906年(明治39)11月号)p.231に、玉井の追悼記事とともに掲載されたものである。

田原休次郎(1871-1907) No.111

軍人。鹿児島県出身。1904-1905年の日露戦争時は第四軍の作戦参謀を務める。1906年(明治39)11月にドイツ留学を命ぜられ渡欧するが、翌1907年8月26日に病気のため留学先で死去した。

【ち】

近重真澄(1870-1941) No.103

無機化学者。高知県出身。1894年(明治27)東京帝国大学理科大学化学科卒業。同大学院修了後、第五高等学校教授を経て、1898年(明治31)に京都帝国大学助教授となる。1902年理学博士。1905-1908年(明治41)の間ドイツに留学し、1907年冬学期から1908年夏学期まではベルリン大学に在籍してさらに化学を追究している。『Ost=Asien』No.103(1906年12月号)の記事、軍医総監石黒[忠恵]男爵の話の独訳は、近重にとっては専門外の仕事であるが、ベルリンの日本人社会(和独会、日本クラブ)における何らかの関係から、編集長老川茂信に委嘱されて行ったものであろう。

ドイツから帰国後は京都帝国大学教授となり、無機化学講座を担当し、わが国の理論無機化学、金相学の基礎を築いた。1918年(大正7)京都帝国大学理学部長となり、化学研究所初代所長を務め、1927年(昭和2)には日本化学会会長に選出されている。

珍田捨巳(1856-1929) No.124

外交官。青森県出身。1905年(明治38)日露講和条約締結時の外務次官を務める。その後明治末から大正にかけて、ドイツ大使(1908-1911)、アメリカ大使(1912-1916)、イギリス大使(1916-1920)などを歴任した。

珍田いわ子(1867-) No.130

外交官珍田捨巳の妻。

【つ】

津軽英麿(1869-1919) No.35

明治期の政治家近衛篤麿の弟。1886(明治19)-1904年(明治37)まで18年間ヨーロッパで過ごし、スイスとドイツの大学で学ぶ。ドイツではボン大学とベルリン大学に通い、後者では1895年冬学期-1898年冬学期、及び1902年夏学期-1903年冬学期に在籍し、いずれの場合も法学を専攻している。後に貴族院議員(1918)や枢密顧問官を務めた。

津田三郎（1857—1901） No.44

軍人。和歌山県出身。ベルリン日本公使官付武官、海軍大佐。海軍大学校教官などを務め、1896年には戦艦富士回航委員としてイギリスに出張した。1901年（明治34）に勤務先のベルリンで、流行性感冒、胃潰瘍、腸チフスを併発して死去した。

角田秀松（1850—1905） No.84

軍人。福島県出身。1901年（明治34）常備艦隊司令官、1903年対馬の竹敷要港部司令官となる。日露戦争後、1905年秋に病気のため死去した。

【と】

トウゴウ タツジロウ（ — ） No.75

陸軍少佐。

東郷平八郎（1847—1934） No.89

海軍軍人。鹿児島県出身。1871—1878年（明治11）の間イギリスに留学する。日露戦争時は連合艦隊司令長官を務める。1905年（明治38）5月の日本海海戦では、ロシアのバルチック艦隊を壊滅した。

【な】

中井元吉（1878—1905） No.92

1903年（明治36）東京帝国大学医学部を卒業。1903年夏学期から1905年冬学期初め頃までベルリン大学に在籍して医学を研究するが、1905年9月29日に、27歳でベルリンにおいて病死した。

長岡外史（1858—1933） No.55

軍人。山口県出身。1886年陸軍大学校卒業後、1899年（明治32）にドイツへ留学している。日露戦争時は参謀次長を務めた。

梨本宮（ — ） No.132

榎原陳政（ —1900） No.31

外交官。清国に8年、イギリスに3年留学し、学位を得て帰国する。1895年（明治28）日清戦争後の講和会議において通訳を務めた。1899年に公使館2等書記官として北京に赴任したが、折からの義和団事件のため、1900年に戦死した。

鳴滝（1846—1911） No.83, 116

シーボルト Frhr.Alexander von Sieboldの筆名。昨年度の拙稿「『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—」（I—36）pp.62—63を参照されたい。

【に】

西寛二郎（1846—1912） No.110, 112

軍人。鹿児島県出身。西南の役、日清戦争などの戦いを経た後、日露戦争時は第一軍に所属し、遼陽、沙河、奉天などの戦闘に参加した。戦後は教育総監、軍事参議官などを務めた。

西野文太郎（ —1889） No.71

1889年(明治22)2月11日、憲法発布式の日、初代文部大臣森有礼(1847-1889)を暗殺した。
西浜・松井一座 No.23

1900年初頭にドイツで興行した日本人の曲技師一座。下の写真は『Ost=Asien』No.23(1900年(明治33)2月号)p.509に掲載されたものである。宮岡謙二『異国遍路 旅芸人始末書』(I-53)p.100によれば、この松井とは曲独楽まわしの松井源水のことであろうか。本稿pp.70-71の「福島, T.のロイヤル日本一座」の項も参照されたい。



仁徳天皇 (-) No.13

記紀では第16代天皇としている。

【の】

乃木希典(1849-1912) No.78

陸軍軍人。山口県出身。森鷗外とほぼ同時期の1886-1888年(明治21)にドイツに留学し、ドイツ陸軍の兵制と兵学を学ぶ。日露戦争時は第3軍司令官を務めた。

野口米二郎(1875-1947) No.133-139

詩人。愛知県出身。慶應義塾を中退後、1893年(明治27)に渡米し、苦学の後サンフランシスコの日本字新聞社の記者となる。同時期に老詩人ウォーキン・ミラーの書生となり、1896年に第一詩集『Seen and Unseen』をヨネ・ノグチの名で出版し注目された。1902年には『日本少女の米

国日記』と『日本人小間使いのアメリカ書簡』を出版し、その後ロンドンに渡った。1904年（明治37）に帰国し、翌1905年に慶應義塾大学英文科教授となり、以後40年間勤務した。彫刻家イサム・ノグチは長男。なお『日本少女の米
国日記』は、バウマン,F. によってドイツ語に訳され、『Ost=Asien』No.133-139号（1909年8月号-1910年2月号）に掲載された。詳細に関しては「『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—」（I-36）p.43を参照されたい。右のイラストは、『Ost=Asien』No.132（1909年（明治42）7月号）p.512に掲載されたものである。

〔参考文献〕 亀井俊介「ヨネ・ノグチの英詩～『見界と不見界』を中心に」平川祐弘他編『講座比較文学第5巻』（東京大学出版会、1973）pp.303-321



野津道貫（1842-1908） No.85

陸軍軍人。鹿児島県出身。薩英戦争、戊辰戦争などに従軍した。1876年（明治9）には訪米し、アメリカ建国100年を記念したフィラデルフィア万国博覧会に、日本使節団の一員として参加している。また1878年にはフランスとドイツに渡り、兵制を視察して新時代の陸軍を研究した。その後日清戦争では第二軍司令官、日露戦争では第四軍司令官を務めた。〔参考文献〕 阿部珠理「野津元帥を知っていますか～米先住民の英雄に惹かれ辺境へ」『朝日新聞』2001年9月25日

【ひ】

日置益（1861-1926） No.121

外交官。三重県出身。1888年（明治21）帝国大学法科大学（現東京大学法学部）卒業。ドイツ臨時代理大使（1907-1908）、アルゼンチン公使（1909-1914、チリ、ペルー公使兼任）、中国公使（1914-1915）、スウェーデン公使（1918-1920、ノルウェー、デンマーク公使兼任）、ドイツ大使（1921-1923）などを歴任した。

東勝熊（ - ） No.96-97

柔術家。同志社英学校（現同志社大学）を卒業後、アメリカ留学を経てベルリンに行き、欧米人と試合をした。

常陸山（1874-1922） No.117

明治、大正の力士。1903年（明治36）に第19代横綱常陸山谷右衛門となる。梅ヶ谷藤太郎とともに、梅・常陸時代を築き、この人気によって両国国技館が建てられた。

広瀬武夫（1868-1904） No.74

海軍軍人。大分県出身。1897年(明治30)にロシアのペテルブルクに留学し、2年後の1899年からは同地の駐在武官となった。1902年にシベリア経由で帰国したが、1904年(明治37)、日露戦争時の第二次旅順港口閉塞作戦において戦死した。

広部周助(1875-1907) No.111

法学者。千葉県出身。1900年(明治33)東京帝国大学法科大学卒業後、1902年に京都帝国大学助教授となり、経済統計関係の講義を担当する。その後1905年8月からミュンヘン大学に留学し、マイヤー教授とブレンターノ教授のもとで学んだ。その折、オーストリアとハンガリーの諸制度を調査するためにウィーンとブダペストに行き、さらにトルコから中央アジアまで足をのびした。しかしトルキスタンで病気にかかり、療養のために一旦ミュンヘンに戻ったが、1907年(明治40)8月1日に同地で死去した。享年32歳であった。[参考文献]「広部周助法学博士没」『Ost=Asien』No.111号

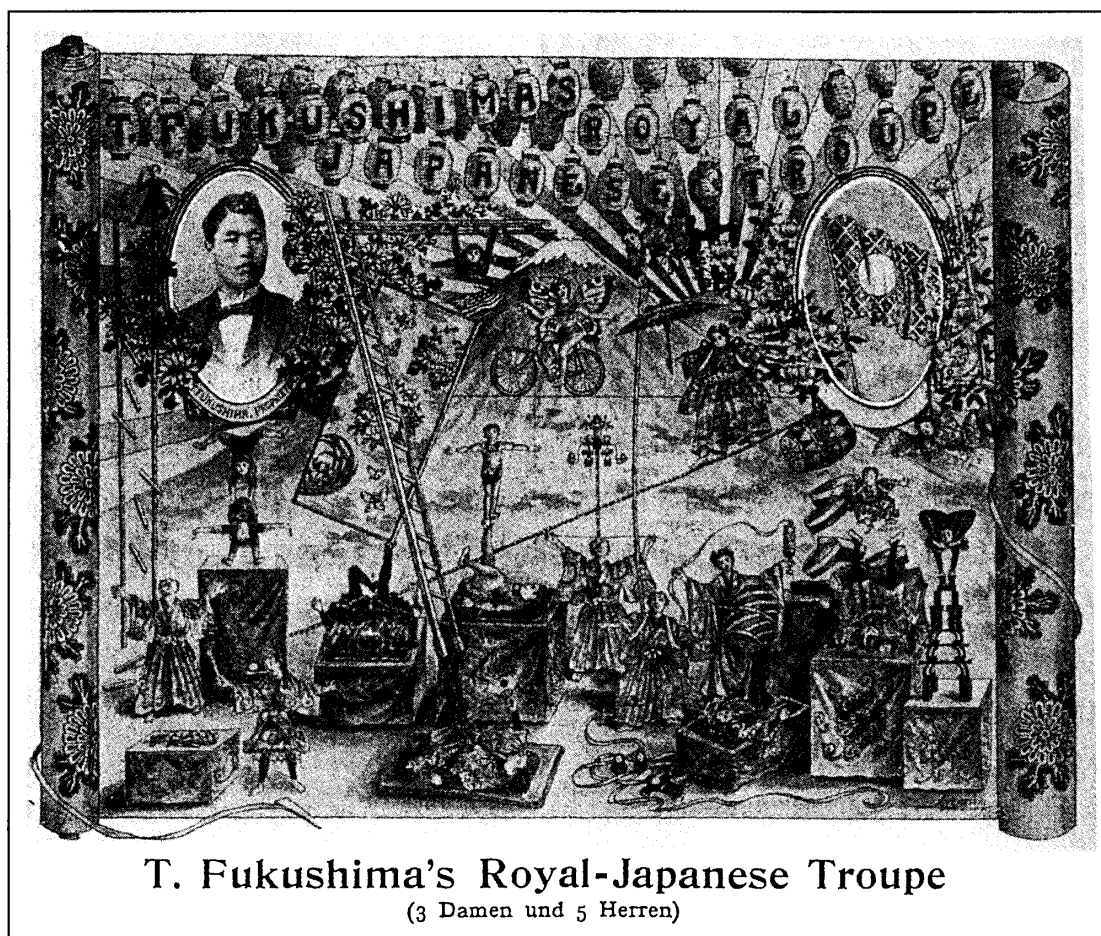
【ふ】

福島, T.のロイヤル日本一座 No.20

1899年末にドイツで興行した日本の曲芸師一座。当時は格式を高く見せるために、Royalという名称をよく使用したようである。この分野の文献として、かなり早い時期に刊行された宮岡謙二『異国遍路 旅芸人始末書』(I-53) p.100によれば、この福島とは軽業師の福島常吉のことであろうか。

幕末から明治にかけて、興行のために海外に出かけた曲芸師などの記録・研究に関しては、近年倉田喜弘『一八八五年ロンドン日本人村』(I-55)、大島幹雄『海を渡ったサーカス芸人 コスモポリタン沢田豊の生涯』(I-56)、倉田喜弘『海外公演事始』(I-58)、宮永孝『海を渡った幕末の曲芸団 高野広八の米欧漫遊記』(I-59)などの貴重な文献が刊行されている。実はこれらの分野の研究においても、『Ost=Asien』は歴史的な一次資料を提供しているのである。例えば次のページのポスターは、『Ost=Asien』No.20(1899年(明治32)11月号) p.350に掲載された福島, T.のロイヤル日本一座のものであるが、他にも西浜・松井一座の写真がNo.23(1900年(明治33)2月号)に掲載されている(本稿p.68参照)。また目次には名前が出てこないが、No.130号(1909年(明治42)5月号)の広告欄p.436には、両国一座の写真を見ることが出来る。倉田喜弘『一八八五年ロンドン日本人村』p.141によれば、これは両国松之助の一族であろうか。

次のページのポスターには、以下のような説明文が付いている。「福島, T.のロイヤル日本一座(女性3人と男性5人)は、11月1日から30日まで、ケルンの帝国ホールで公演を行っている。この一座はすでに北アメリカ、南アメリカ、中央アメリカにおいて、数々の華々しい芸を披露しており、ドイツ、オーストリア、フランス、ロシアにおいても非常な喝采を浴びた。比類なき技巧とすばらしい器用さは、本当に驚嘆に値する」。これらの公演においては、おそらく音曲の類も伴ったであろうと思われるが、楽器としては三味線や締太鼓などが使われたのであろうか。そしてまた、それらの日本の伝統音楽は、異文化の地でどのように受容されたのであろうか。



藤井房一（ -1900） No.31

陸軍軍人。義和団事件（1899-1901）の折、歩兵第11連隊に所属し、清国において死去した。

藤代禎輔（1868-1927） No.41

ドイツ文学者。別号藤代素人。千葉県出身。日本におけるドイツ文学研究の草分けの一人で、1891年（明治24）に東京帝国大学文科大学独逸文学科を卒業した。その後東京高等師範学校（現筑波大学）、第一高等学校教授を経て、京都帝国大学講師となる。1900年（明治33）には、英国留学の夏目漱石、ドイツ留学の芳賀矢一（国文学者）などと同じ船で渡欧し、ベルリン大学に留学した。

滝廉太郎がライプツィヒから帰国する際に開かれた送別会（1902年7月6日）には、藤代禎助も同席している（小長久子『滝廉太郎』（I-96）pp.233-234）。この時の写真は、遠藤宏『明治音楽史考』（有朋堂、1948）口絵21図や、属啓成『滝廉太郎 音楽写真文庫VI』（音楽之友社、1961）pp.62-63に掲載されており、藤代禎助、滝廉太郎の他に、金子馬治（哲学）、川合貞一（文学）、河合十太郎（理学）、谷口吉太郎（医学）、塚原政次（哲学）、島崎赤太郎（音楽）など合計14人が写っている。島崎赤太郎（1874-1933）は滝よりも5歳年上で、東京音楽学校（現東京芸術大学）卒業後ドイツに留学し、帰国後同校でオルガン、音楽理論などを教えた。島崎の生涯に関しては、赤

井脇『オルガンの文化史』（青弓社、1995）pp.108-150に詳しい。

藤代禎助は1902年に帰国後、東京帝国大学講師を経て、1907年（明治40）京都帝国大学に新設の西洋文学講座の教授となった。論文集に『鵝筆余滴』（弘文堂、1927）、翻訳に『独訳万葉集第五卷鈔』（藤代博士記念事業会、1939）などがある。美学者の大塚保治とともに、夏目漱石の親しい友人であった。本稿p.55の写真の2列目、右から3人目の人物が藤代禎助である。

伏見宮〔博恭〕（1875- ） No.138

軍人。1893年にドイツ海軍大学校を卒業し、1907年（明治40）からイギリスに駐在した。

【ほ】

星亨（1850-1901） No.40

政治家。1874年（明治7）イギリスに留学。日本人初のバリスター・アット・ロー barrister at law（弁護士）を取得（1877）し、帰国後司法省付属代言人（弁護士）となる。その後衆議院議員（1892）、アメリカ公使（1896-1898）、逓信大臣（1900）などを経て東京市会議長となるが、在任中の1901年（明治34）に暗殺された。

穂積陳重（1856-1926） No.24-29, 31, 33, 52

法学者。愛媛県出身。憲法学者穂積八束の兄。大学南校、開成学校で法学を学び、1876年（明治9）からイギリスに留学した。ついでドイツに居を移し、1880年夏学期から1881年夏学期まではベルリン大学に在籍して法学を研究している。帰国後、1882年（明治15）に東京大学法科大学教授となり、以後1912年（明治45・大正1）まで同大学に勤務した。その間、1888年には日本最初の法学博士となっている。当初フランス法が主流であった日本に、イギリス法・ドイツ法を移入し、明治中期以降の日本におけるヨーロッパ法の受容に大きな役割を果たした。東京大学における法理学（現法哲学）講座の創始者としても知られる。

ホリオ セイイチ（ - ） No.88-89

【ま】

松方正義（1835-1924） No.50, 52

政治家。鹿児島県出身。明治維新の時すでに33歳であったが、維新後長く大蔵大臣を務める。1877年（明治10）勸業局長兼仏国博覧会副総裁となり、1878年のパリ万国博覧会の折に渡仏した。イギリス、ドイツ、オランダ、ベルギーを巡って、翌年帰国している。1881年（明治14）参議兼大蔵卿となり、兌換制を確立して紙幣を整理し、翌1882年に日本銀行を創設した。1885年内閣制による初代の大蔵大臣となり、その後伊藤博文、黒田清隆、山県有朋の各内閣でも同大臣を務めている。また1891-1892年に第1次松方内閣、1896-1898年に第2次松方内閣を組閣した時には、いずれの場合も大蔵大臣を兼任した。1902年（明治35）には欧米を視察し、帰国後日本赤十字社長、枢密院顧問官（1903）、内大臣（1917）などを歴任した。

松平ゲオルク・セイジロウ（ - ） No.55

名前のセイジロウは不詳であるが、『Ost=Asien』 No.55, p.297には次のページの写真が掲載され

ており、そこには以下のような説明が付いている。「九州島原藩最後の大名の子息である松平ゲオルク・セイジロウ氏は、ドレスデンで1902年（明治35）7月30日に、オピッツ陸軍少佐の娘と結婚した。彼らは9月29日にベルリンを後にし、同日ブレーメンから横浜行きの汽船膠州号で旅立った。その前日、和独会はベルリンのホテル「プリンツ・アルブレヒト」で彼らの送別会を催した」。

島原藩最後の大名は松平（深溝）忠和であり、この人物は、元水戸藩主徳川斉昭の16男である。また徳川最後の将軍15代慶喜は、同じく徳川斉昭の7男である。従ってこの写真のセイジロウは、徳川慶喜の甥にあたる。



松原新之助（1853—1916） No.53

水産学者。島根県出身。水産学の発展と水産技術の普及に貢献した。1871年（明治4）に上京し、英語・独語を学んだ後、東京医学校（現東京大学医学部）に入学した。同校で、日本最初の本格的な博物学の講義を行ったお雇い外国人ヒルゲンドルフ（Hilgendorf, F. M. 1839-1904）の通訳を務め、大きな影響を受けて魚類学を専攻する。1876年（明治9）外科医学教授、1878年駒場農学校教授となった後、1879—1881年（明治14）にドイツへ留学した。ベルリン大学には1880年冬学期から1881年夏学期まで在籍し、水産動物学を研究している。帰国後1887年（明治20）に農商務省技師となり、農商務省水産講習所（現東京水産大学）の設立に尽力し、1897年にそれが設置されるとともに初代の所長となった。

松村松年（1872—1960） No.36—37, 44—45

昆虫学者。兵庫県出身。1895年（明治28）に札幌農学校（現北海道大学）を卒業し、同校助教

授となる。その後ドイツに留学。1899年冬学期から1900年(明治33)夏学期までベルリン大学に在籍し、動物学を専攻した。帰国後、1907年(明治40)に東北帝国大学農科大学教授、1919年(大正8)に北海道帝国大学教授となり、1934年(昭和9)に退官した。日本における昆虫学の先覚者であり、多数の新種を記載発表し、日本産昆虫の和名の統一および命名を行った。多くの昆虫学専門家を育て、多数の著書論文を著したが、『日本昆虫学』(1898)は、日本人による近代昆虫学の最初の著作であった。

右の絵は、ベルリンの玉井喜作宅における『寄せ書き』(I-34)の、1901年(明治34)2月26日付のページからの引用である。下の文字anpustendは「(尺八を)吹奏している」の意味であろうが、西洋楽器の吹奏の場合はblasenを使う。従っ



てanpustenを「吹奏する」の意味で使用するのは誤用であるが、この語は「(息を)吹きかける」というニュアンスの言葉なので、和楽器である尺八にはぴったりの表現と言えるかもしれない。あるいはこれを描いた人物が、酩酊しながら懸命に吹奏する松村の様子を見て、この語に含まれる「(火を)吹く」というニュアンスを込めて使った、一種の駄洒落であろうか。

マノ, S. (-) No.110-113

【み】

美濃部俊吉 (1869-1945) No.52

官僚。兵庫県出身。法学者美濃部達吉の兄、経済学者美濃部亮吉の伯父。1893年(明治26)に帝国大学法科大学(現東京大学法学部)政治学科を卒業し、農商務省に入省した。商工業視察のため、1896年と1900年の2度ヨーロッパに出張している。この2度目の出張の時に、ベルリンの玉井喜作宅で、俊吉・達吉の兄弟が揃って『寄せ書き』(I-34)に名前を記している。それは1900年(明治33)11月17日付のページである。

この日は、玉井が日本を離れてロシア横断の旅に出発した8年目の記念日ということで、当時ベルリンに在住した知人達が玉井宅に集まり、「東亜料理」を食べながら歓談した様子が伺われる。この日は、美濃部兄弟を含めて合計9名が集まったようである。すなわちこのページには、本稿で

取り上げた巖谷小波、藤代禎助、津軽英麿とならんで、さらに水野敏之丞（酔香、1862—1944、1900年冬学期—1901年冬学期にベルリン大学在籍・物理学専攻、後京都帝国大学教授）、望月惇一（1859—1930、1900年冬学期—1901年夏学期にベルリン大学在籍・医学専攻、後京都府立医学校校長）、戸塚機知（1868—1910、1900年冬学期—1902年冬学期にベルリン大学在籍・医学専攻）、山上兼輔（1862—？、1900年冬学期—1901年夏学期にベルリン大学在籍・医学専攻）が各自署名を残している。

美濃部俊吉は、その後大蔵書記官、大蔵省理財局銀行課長などを経て、1903年（明治36）34歳の時に総務局文書課長を辞職した。それから後は、北海道拓殖銀行頭取（1903—1916（大正5））、朝鮮銀行総裁（1916—1924（大正13））、満州取引所理事長（1933—1939（昭和14））などを務めた。[参考文献]渡辺實『近代日本海外留学生史』下巻（I—39）、Hartmann, Rudolf. *Japanische Studenten an der Berliner Universität 1870—1914.*（I—33）、泉巖復刻『玉井喜作宅における寄せ書き』（I—34）

【む】

村井（—） No.32

名前不詳。法学博士。義和団事件（1899—1901）の時に、大阪朝日新聞の北京駐在通信員を務めた。1900年（明治33）、義和団によって北京の列国公使館区域が占領された際に、英・日・米・仏・独・伊・露・奥の8カ国連合軍は、居留民保護を名目に天津・北京方面に出兵した。その時北京にいた村井は、その包囲された区域の中にいたのだが、その間に彼が書いた日記の内、1900年6月19日から同年8月14日までの所が、玉井喜作の独訳により『Ost=Asien』No.32（1900年11月号）pp.353—362に掲載されている。

【め】

明治天皇（1852—1912） No.56—57, 114—115, 125, 136

在位1867—1912年。名は陸仁。

【も】

森竹素彦（1884—1907） No.107

東京高等工業学校（現東京工業大学）機械科を卒業後、1906年（明治39）にベルリンに行き、シャルロテンブルク工業学校（現ベルリン工科大学）に入学した。しかし翌1907年4月19日に、肺疾患のため死亡した。享年23歳。[参考文献]「工業学校学生、森竹素彦」『Ost=Asien』No.107（1907年4月号）

森村兄弟社（1876—） No.1

貿易商社。森村兄弟社（森村ブラザーズ）は、陶磁器産業の企業集団である今日の森村グループ（森村商事（株）、ノリタケカンパニーリミテド、東陶機器（株）、日本ガイシ（株）、日本特殊陶業（株）など）のルーツである。兄森村市左衛門（1839—1919）は横浜に舶来雑貨店を開き、弟の豊とともに、1876年（明治9）貿易商社森村組を設立した。兄は1882年の日本銀行設立の際に

監事となり、1900年には同行理事となっている。

弟森村豊（1854－1899）は、1874年に慶應義塾を卒業後アメリカに渡り、ニューヨーク州イーストマン商業学校で学んでいる。そして1876年に、ニューヨーク6番街に「日の出商会」を設立し、日本からの雑貨の輸入販売を開始した。1889年（明治22）には、フランス革命百年を記念して開催されたパリの万国博覧会に、森村兄弟は揃って出かけていき、そこで精緻に絵付けされた白い磁器に接した。やがてこれを日本で生産することを計画し、1904年（明治37）、名古屋駅に近い則武^{のり}の地に「日本陶器合名会社」を設立した。これが発展して、今日の陶磁器会社ノリタケカンパニーリミテドなどになった。

パリでは19世紀後半に、万国博覧会が5度開催されている。1855、1867、1878、1889、1900年である。これらを通して次第にジャポニズムの熱が高まっていき、やがてそれが一つのきっかけとなり、美術史上で近年再評価されてきたアール・ヌーヴォーが誕生した。日本人がパリで白い磁器に出会ったのは、まさにこのような時期のことであった。磁器の歴史を振り返ってみると、ここには文化の伝播、吸収、逆輸入といった興味深い現象が見られる。

すなわち、中国の磁器がヨーロッパに紹介されたのは、13世紀のマルコ・ポーロ『東方見聞録』が最初である。しかし、中国・日本の磁器が実際にヨーロッパにもたらされるようになるのは、16世紀後半以降のことであった。しかもヨーロッパには磁器が無かったために、貴重品として珍重される時期が長く続いた。その後1708年にドレスデン城内で、初めて白色磁器の製作法が開発され、すぐに近郊のマイセンに製陶所が開かれることになった。やがて、フランスにも1738年に磁器の製作技法が伝わり、1756年にセーヴルの王室製陶所が生産を開始した。

日本人が、ヨーロッパのディナー皿などの絵付けされた白い磁器をパリ万国博覧会で見たのは、それから百数十年後のことである。しかし今度は逆にその技術を日本が取り入れ、それが一つの大きなきっかけとなって、日本は今日世界有数の陶磁器輸出国になっているのである。森村兄弟社の歴史を調べてみると、このような非常に長い時間的広がりを持つ磁器の歴史が浮かび上がってくる。

【や】

柳澤保恵（1870－1936） No.112－113

統計学者。新潟県出身。1894年（明治27）に学習院大学科を卒業し、その後6年間ヨーロッパに留学した。1895年冬学期から1897年夏学期まではベルリン大学に在籍し、統計学、社会学、国家学を学んでいる。その後シュトラスブルク大学、ウィーン大学においても研究を続け、さらに1897年にはブリュッセル、1899年にはパリで修学時代を過ごした。1900年（明治33）に帰国後、早稲田大学で統計学を講義した。以来内閣統計局嘱託、国勢調査局参与などを務め、各種の統計調査に加わり、1913年（大正2）に柳澤統計研究所を創設した。日本の統計学の先覚者であり、また政界、財界においても活動を行った。

山県有朋（1838－1922） No.29

明治・大正時代の藩閥政治家。明治10年代から約40年間、軍隊と政治の中核に位置し、天皇制の確立と発展を図る。第1次山県内閣（1889-1891）、第2次山県内閣（1898-1900）を組閣した後、日露戦争時は参謀総長を務めた。

山口素臣（1846-1904） No.31

陸軍軍人。義和団事件（1899-1901）の折、北京派遣軍司令官を務めた。

山田顕義（1844-1892） No.83

陸軍軍人、政治家。山口県出身。1871年（明治4）陸軍少将就任後、岩倉使節団の米欧回覧の旅（1871-1873）に理事官の肩書きで随行し、ヨーロッパ諸国の軍制調査に携わった。その後佐賀の乱（1874）、西南戦争（1877）への出征を経て、1885年（明治18）第一次伊藤博文内閣発足とともに司法大臣となる。以後第一次松方正義内閣まで、4内閣に司法大臣として留任した。1889年（明治22）には日本法律学校（現日本大学）を創設している。[参考文献] 中村理平「山田顕義と洋楽」中村理平『キリスト教と日本の洋楽』（I-64）pp.119-121

ヤマノウチ（ - ） No.137-139

法学博士。

山本権兵衛（1852-1933） No.109

海軍軍人、政治家。鹿児島県出身。1874年（明治7）海軍兵学寮卒業後、1877-1878年にはドイツ軍艦に乗船して世界周航を行っている。1898年（明治31）から1906年（明治39）まで、山県有朋、伊藤博文、桂太郎各内閣の海軍大臣を歴任し、日露戦争時の海軍最高責任者を務めた。その後1913-1914年（大正3）と1923-1924年（大正13）の2度、山本内閣を組閣した。山本権兵衛は海軍・薩摩閥の中核として、山県有朋の陸軍・長州閥に対峙した。

【正誤表】

一昨年度の拙稿『『Ost=Asien』研究—その1. 全目次—』（I-35）における正誤表を、昨年度の拙稿『『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—』（I-36）p.71に掲載したが、その後以下の訂正すべき諸点にも気がついたのでここに追記しておきたい。

場 所	誤	正
p.116上から13行目	夫人	婦人
p.121下から13行目	フクシマ	福島
p.123下から15行目	ニシハマ・マツイ	西浜・松井
p.124下から14行目	[条約の]	条約の
p.125下から4行目	皇族、閑院[宮	閑院宮[
p.130上から3行目	夫人	婦人
p.134下から17行目	運輸	通信
p.149下から16行目	東洋学者	東洋学

場 所	誤	正
p.150上から7行目	夫人	婦人
p.152上から9行目	医師	医師 (写真)
p.153上から8行目	事務長	書記官
p.161上から7行目	シベリア在住及びシベリアから	シベリアから
p.164上から15行目	ロストック	ロストック
p.172下から5行目	義捐金	私の義捐金
p.174下から3行目	義捐金	私の義捐金
p.176上から15行目	15	十五
p.178下から5行目	夫人	婦人
p.179下から12行目	工学部	工業学校
p.180上から5行目	価値	価値 [I]
p.182上から8行目	シゲノアネキ	重野安繹
p.182上から13行目	大使館員	大使
p.182上から14行目	価値	価値 [II]
p.188上から1行目	皇族 [久邇宮] 邦彦	久邇宮 [邦彦王]
p.188下から9行目	皇族 [久邇宮] 邦彦	久邇宮 [邦彦王]
p.189下から17行目	Tao	Tso
p.192下から13行目	での日本皇族 [久邇宮] 邦彦	における日本の久邇宮 [邦彦王]
p.194上から13行目	皇族 [久邇宮] 邦彦	の久邇宮 [邦彦王]
p.194上から14行目	皇族 [久邇宮] 邦彦	久邇宮 [邦彦王]
p.195上から8行目	での日本皇族 [久邇宮] 邦彦	における日本の久邇宮 [邦彦王]
p.196上から6行目	案内	計画
p.196下から7行目	案内	計画
p.197下から14行目	案内	計画
p.198下から6行目	日本	日本の
p.198下から5行目	多くの	親愛なる
p.198下から4行目	皇族梨本 [宮守正王]	梨本宮
p.199下から13行目	39	30
p.202下から4行目	の独自性	に関するいくつかのこと [I]
p.203下から12行目	の独自性 [I]	に関するいくつかのこと [II]
p.203下から17行目	帝国皇族伏見 [宮]	伏見宮 [
p.204上から12行目	の独自性 [II]	に関するいくつかのこと [III]

また昨年度の拙稿、「『Ost=Asien』研究—その2. 人名注解；外国人編—」（I-36）における訂正は以下の通りである。

場 所	誤	正
p.41下から6行目	顧	考
p.57上から14行目	Yun	Yün
p.60上から12行目	事務長	書記官
p.60上から14行目	事務長	書記官
p.62下から6行目	35,	35-36,
p.67下から13行目	消失	焼失
p.68上から5行目	消失	焼失